

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 3 年 6 月 23 日現在

機関番号：62615

研究種目：基盤研究(B)（特設分野研究）

研究期間：2017～2020

課題番号：17KT0065

研究課題名（和文）手話・触手話・指点字にみる日本語の影響とマルチモダリティ

研究課題名（英文）Multimodal Research on Sign Language, Tactile Sign Language and Finger Braille in Interaction: A Bilingual and Bimodal Study of the Influence of Spoken Language

研究代表者

坊農 真弓（Bono, Mayumi）

国立情報学研究所・情報社会相関研究系・准教授

研究者番号：50418521

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 13,000,000円

研究成果の概要（和文）：本プロジェクト期間全体において、既存データおよび新規データのアノテーションとトランスクリプト作成に注力した。その結果、文字の文化や書き言葉を持つ日本語が、対面性や共存性を核とする手話・触手話・指点字の相互行為にどのような影響を与えているのかについての理解を促進するための、数々の研究成果を生み出すに至った。主として、国外に存在があまり知られていない指点字に焦点を当て、指点字相互行為場面の分析結果を論文としてまとめた。また、研究活動のみならず、アウトリーチとして、様々な公開イベントを企画・実施し、国内外の関連研究者・関連団体関係者と意見交流する場を数多く提供することができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究課題では、研究論文を发表することのみならず、国内外における本研究課題の立ち位置を明確にするために、国際ワークショップや意見交換会を多数企画実施した。各年度の主たるアウトリーチ活動は次の通りである。

平成29年度は、触手話に関連するイベントを国内で3つ開催した。平成30年度は、ストックホルム大学、モナシユ大学との共同シンポジウムを日本国内で実施し、各国のオラリティと社会についての現状をお聞きした。令和2年度は、査読付きジャーナル掲載に加え、分担者(大杉)による「盲ろう者の五感体験に関する情報・意見交換会」が実施された。

研究成果の概要（英文）：During the entire project period, we focused on annotating and transcribing existing and new data. As a result, we have produced a number of research results to promote our understanding of how the Japanese language, with its written culture and written language, influences sign language, tactile sign language, and finger Braille interactions, which have face-to-face interaction and co-existence at their core. We have focused mainly on finger Braille, which is not well known outside of Japan, and summarized the results of our analysis of finger Braille interactions in papers. In addition to our research activities, we have planned and implemented various public events as outreach activities, and provided many opportunities to exchange opinions with related researchers and organizations in Japan and abroad.

研究分野：言語学

キーワード：手話言語 日本手話 触手話 指点字 相互行為 オラリティ 社会

1. 研究開始当初の背景

研究代表者は研究開始以前、日本における手話相互行為の手話に焦点を当てた研究を進めてきた。得られたデータを会話分析・相互行為分析の手法で微細に観察していくと、ろう者は手話言語のみならず、日本語を様々な方法で自らの相互行為に取り入れていることが明確になった。以上のことから、これからは手話言語だけに研究対象を絞るのではなく、手話話者が持つ日本語運用能力やリテラシーに関する問題を扱い、彼らのコミュニケーションの実態に迫る必要があると考えた。その結果、コミュニケーションの中で観察される日本語の使用や日本語の影響について社会調査し、その上で手話の相互行為を議論すべきという着想に至った。また、本研究課題では、研究対象を手話のみならず、触手話や指点字のコミュニケーションにまで拡げることとした。

以下では、本研究課題が対象とする、手話、触手話、指点字の三つに分けて、国内・国外の研究動向及び位置づけを説明する。

[手話研究について]

手話研究は1950年アメリカの言語学者ウィリアム・ストーキーによって始められた(Stokoe, 1950)。ストーキーを出発点とする手話言語学の研究は、手話が音声言語とは独立した一つの言語であることを証明することに重きが置かれてきた。また、こういった流れは脳科学研究も包含し、手話言語の科学研究を牽引してきた。さらに近年、手話言語もしくは手話使用者を対象とするバイリンガル研究が注目を浴びようになってきた。そのうちの一つはバイモーダル・バイリンガリズムと呼ばれるものである。これは二つの音声言語が混ざる事象を検討してきたバイリンガル研究とは対象的に、バイモーダル・バイリンガリズム研究は、手というモダリティを用いる言語と、発声というモダリティを用いる言語とが混ざる事象を対象にする。Emmorey et al. (2003)は、CODAと呼ばれるろうの両親を持つ聞こえる成人の言語使用をバイモーダル・バイリンガリズムの観点から観察している。また、この流れの中、口話教育を受けたろう者が相互行為においてどのように口の動き(マウジング, mouthing)を用いるのかについての研究が徐々に始まっている(坊農, 2017)。日本におけるろう教育にはこれまで口話教育(日本語教育)を推進してきた経緯がある(金澤, 2001)。この影響でろう者は音声的フィードバックはなくとも、音声発話の口の動きを産出することができる。また、聞こえる人間がマジョリティである社会では、ろう者は店頭や郵便局などのやりとりで読唇と口話を求められることが多く、音声日本語に接する機会が多い。

[触手話研究について]

触手話研究はまだそれほど研究が少ない。主として、次の4つがある。Mesch (2000)による盲ろう者の対話における順番交替の現象の議論、アメリカシアトル発の「プロタクタイルムーブメント(Pro-tactile movement)」と呼ばれる盲ろう者の自立プログラムを対象としたEdwards (2014)によるフィールドワーク調査、ノルウェーの盲ろう者コミュニティにおける「ハプティックタッピング」の現象に着目したRaanes & Berge(2017)による調査、オーストラリアの盲ろう者の相互行為をマルチモーダルインタラクション分析、社会言語学の観点から議論したIwasaki et al. (2018)、Willoughby et al. (2020)による研究がある。触手話は、先に聴覚を失い、その間手話を習得し、その後失明した場合に使われるコミュニケーション手法である。上述した日本におけるろう教育の影響もあり、聴覚と視覚を失ってもなお、手話にマウジングが伴っていたり、日本語会話に頻繁に見られるようなうなずきが伴っていたりする。触手話を用いる日本の盲ろう者がどのようにコミュニケーションをしているかについては、これから解明されるべき課題である。

[指点字研究について]

指点字研究は国外の研究は全く存在しない。なぜなら、指点字は盲ろう者の福島智(研究分担者)とその母親によって作り上げられた日本発のコミュニケーション手法だからである(福島, 2011)。市川(2001)は工学的観点から、指点字の抑揚やリズムが想像以上に用いられているという事実を報告している。指点字とは、対話相手の左右の三本の指(人差し指、中指、薬指)を点字タイプライターのキーに見立てて、点字を打つ要領でタップして情報を伝えるコミュニケーションの手法である。日本語の文字を打つため、タップされた情報は韻律や間合いなどが削ぎ落とされ、限りなくデジタルな情報に変換されてしまうのではないかと一見思いがちである。しかしながら、熟達した指点字通訳者であればタップの仕方でも発話態度や感情まで伝達できる。

以上のように、手話、触手話、指点字の相互行為には様々なレベルで日本語が介入している。日本語は文字の文化や書き言葉を持つ言語である。本報告書のような第三者に向けた提案・報告文書や SNS 等のやりとりでは、書記日本語の運用能力が必要となる。本研究課題では、手話、触手話、指点字の相互行為に見られる、即興的で一過性の話し言葉の影響に注目し、彼らのコミュニケーションの進め方とそこにある日本語の影響について議論することを目指していた。

2. 研究の目的

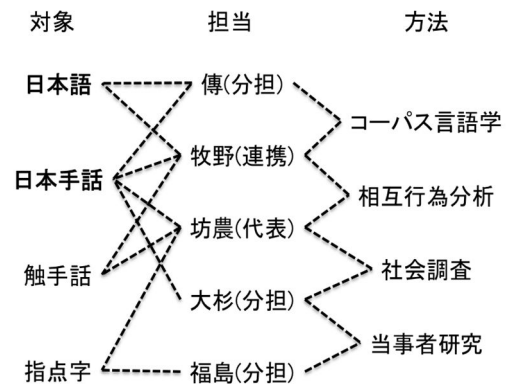
本研究の目的は、文字の文化や書き言葉を持つ日本語が、対面性や共在性を核とする手話・触手話・指点字の相互行為にどのような影響を与えているのかを、コーパス言語学 相互行為分析、社会調査、当事者研究の観点から明らかにすることであった。日本に住むろう者は日本手話でコミュニケーションする。先に聴覚を失い、その後視覚を失った盲ろう者は触手話でコミュニケーションする。先に視覚を失い、その後聴覚を失った盲ろう者は指点字でコミュニケーションする。しかし、状況はそれほど単純ではない。ろう者と盲ろう者が言語獲得期のどの時点で日本語に接したかで、コミュニケーションの形は多様に变化する。近年手話研究の分野では、バイモーダル・バイリンガリズム研究が盛んになっており、本研究はその流れを汲みつつ、触手話や指点字のコミュニケーションにまで対象を拡げ、新しい研究手法を提案するものである。

3. 研究の方法

研究期間内には、以下の3つの方法を実施した。

- (1) 手話、触手話、指点字のやりとりをなるべく日常に近い場面で収録する。
- (2) 手話、触手話、指点字の相互行為におけるマルチモーダル情報を ELAN(<https://tla.mpi.nl/tools/tla-tools/elan/>)を用いて書き留める。
- (3) 手話、触手話、指点字のデータを「日本語の影響」という観点で分析する(例：手話に付随して表出されるマウジング(音声言語由来の口の動き)と手話表現の関係)

また、右の図と表のように、日本語、日本手話、触手話、指点字を対象に、メンバーがそれぞれの方法(コーパス言語学、相互行為分析、社会調査、当事者研究)で、進めることを予定していた。



担 当	個別研究テーマ (研究開始当初)
坊 農	手話相互行為におけるマウジングと修復の連鎖：日本語口話教育の影響から、など
大 杉	ろう教育における手話と日本語の使用実態調査、など
福 島	指点字と日本語の関係：指点字開発・使用者によるオーラルヒストリー研究、など
傳	日本語対話と日本手話対話にみる順番交替システムの普遍性と個別性、など
牧 野	日本手話と触手話相互行為場面にみる F 陣形システムの比較、など

4. 研究成果

本プロジェクト期間全体において、既存データおよび新規データのアノテーションとトランスクリプト作成に注力した。その結果、文字の文化や書き言葉を持つ日本語が、対面性や共在性を核とする手話・触手話・指点字の相互行為にどのような影響を与えているのかについての理解を促進するための、数々の研究成果を生み出すに至った。主として、国外に存在があまり知られていない指点字に焦点を当て、指点字相互行為場面の分析結果を論文としてまとめた。また、研究活動のみならず、アウトリーチとして、様々な公開イベントを企画・実施し、国内外の関連研究者・関連団体関係者と意見交流する場を数多く提供することができた。

平成 29 年度は主として、触手話に関連するイベントを国内で 3 つ開催し、触手話と指点字を用いた盲ろう者のイベント撮影、国際会議への投稿を実施した。また、本プロジェクトの土台となった論文(坊農, 2017)が発表された。平成 30 年度は主として、ストックホルム大学、モナシュ大学との共同シンポジウムを日本国内で実施し、各国のオラリティと社会についての現状をお聞きした。また、関連団体(東京盲ろう者友の会、日本盲ろう者協会)への訪問を実施した。平成 31 年度(令和元年度)は主として、国際会議で本プロジェクトの成果を報告し、国内査読付きジャーナルに論文掲載が決定した。令和二年度は、査読付きジャーナル掲載に加え、分担者(大杉)による「盲ろう者の五感体験に関する情報・意見交換会」が実施された。そして、研究代表者が第一著者の論文を国際ジャーナル(Lingua)に投稿した。

各年度の主たる研究活動およびアウトリーチ活動は次の通りである。

[平成 29 年度]

海外共同研究者のモナシュ大学 Dr. Louisa Willoughby(2ヶ月間)と同 Dr. Shimako Iwasaki (1ヶ月間)に渡る日本滞在を受け入れ、滞在期間中に様々なイベントやデータ収録を実施した。イベントとは、NII(12/6 開催)と関西学院大学梅田キャンパス(12/12 開催)で実施した触手話に関する講演会である。関西学院大学では一般向けの開催を目指し、NII ではより専門的な内容を含む研究集会としての開催を目指した。それらのイベントには盲ろう者やろう者等の当事者や彼らを支援する通訳介助者の多くの参加があった。またその他に、同期間中にメルボルンにおいて盲ろう当事者として活発に活動する Leah van Poppel 氏を、研究協力者の東京盲ろう者友の会にお連れし、関連研究者および当事者との交流会(12/11 開催)を実施した。また、東京盲ろう者友の会が主催する触手話と指点字による交流会(12/19 開催)の様子を 4 台のビデオカメラで撮影した。同時期に、合宿形式のミーティング(12/16-17 開催)も実施し、議論を進めた。以上のような研究活動の結果、本研究課題が対象とする日本における手話・触手話・指点字を取り巻く相互行為の特徴がより明確に見えてくる結果となった。これらの結果は、平成 30 年度に宮崎で開催される国際言語資源と評価会議(LREC)のコーパス手話言語学ワークショップに採択され、また平成 30 年度に南アフリカで開催された国際ジェスチャー学会(ISGS)のパネルディスカッションに採択された。

[平成 30 年度]

前年度から企画していた様々なイベントや学会発表を実施し、書籍出版に向けた議論を進めた。具体的に年度の前半は、スウェーデン初任のろうの教授であり、盲ろう者の触手話研究の第一人者である Prof. Johanna Mesch(ストックホルム大学)を日本に招聘し、関西(国立民族博物館, 5/13 開催)・関東(国立情報学研究所, 5/14 開催)での講演会を実施した。この講演会には研究者のみならず、盲ろう者、盲ろう通訳介助者が多数参加し、熱心に議論が交わされた。また、翌日(5/15)には東京盲ろう者友の会に Prof. Mesch をお連れし、盲ろう者団体のキーパーソンらとの会談の場を持った。年度の後半は、前年度同様海外共同研究者のモナシュ大学 Dr. Shimako Iwasaki を2か月弱研究室に受け入れ、国際会議へのパネルセッション投稿や、国際ジャーナルへの特集記事企画等について議論を交わした。また、データ収録(指点字対話、指点字通訳インタビュー場面)、データ分析、データセッション、関連団体(東京盲ろう者友の会、日本盲ろう者協会)への訪問等を実施し、国際共同研究連携を強固にした。中でも指点字通訳インタビュー場面はインタビューを分担者の福島智教授を対象とし、当事者としてのオラリティの問題について議論を交わした。また、国際高等セミナーハウス(軽井沢, 11/22-24)での合宿を実施し、データセッション、出版企画について議論を交わした。また、ディスカッサントとして京都大学名誉教授菅原和孝先生をお招きした。本合宿では、本科研費メンバーのみならず、若手研究者による発表も企画し、幅広いディスカッションが繰り広げられた。さらに、令和元年6月に香港で開催された国際語用論学会のパネルセッションに Dr. Shimako Iwasaki と共同で企画を投稿し、採択されるに至った。

[平成 31 年度および令和元年度]

様々なイベントや国際会議発表を実施し、査読付き論文の採録が決定された。具体的に年度の前半は、国際語用論学会(6/9-14, 香港)においてモナシュ大学 Dr. Shimako Iwasaki と共にパネルセッションを実施した。パネルセッションにはオランダラドバウド大学言語学部の Prof. Onno Crasborn をディスカッサントとして招き、世界各国の関連研究者らと活発な議論を行った。その後 Prof. Onno Crasborn を日本に招聘し、本プロジェクトの成果紹介や関連機関への案内、国際手話に関する公開講演会を実施した(6/23, 国立情報学研究所)。年度の後半は、前年度同様 Dr. Shimako Iwasaki を2か月弱研究室に受け入れた。また同時期に、オーストラリアメルボルンの盲ろう当事者である Heather Lawson 氏、盲ろう通訳第一人者の Dr. Meredith Bartlett, 盲ろう通訳者1名を招聘し、盲ろう者の触手話研究の第一人者である Prof. Johanna Mesch(ストックホルム大学)を招聘し、第一回国際ワークショップを実施した(12/14, NII)。また、ワークショップ後に、上記の研究者らと日本、スウェーデン、オーストラリアの盲ろう者コミュニティの実態について意見交換する会合の場を持った。ここには東京都盲ろう者支援センター前田晃秀センター長にお越しいただき、日本の状況をご説明いただいた。本会合の様子は複数ビデオカメラでデータ収録し、今後の触手話、手話、指点字コミュニケーションの研究資料として利用可能なデータとして保管している。最後に、学会誌『認知科学』の特集「「生きる」リアリティと向き合う認知科学へ」に、指点字通訳を介した相互行為に関する論文が採択され、令和二年度に発表されることが決定した。

[令和 2 年度]

平成 31 年度および令和元年度に研究代表者のライフイベントによる研究停止期間があったため、研究期間を一年延長した。本延長期間中には、前年度に採択が決定していた論文が発表された(『認知科学』掲載)。また、本論文にさらに議論を追加し、国際ジャーナル Lingua の特集号に論文を投稿した。イベントとして、大杉豊氏(分担者)により、「盲ろう者の五感体験に関する情報・意見交換会」(2/28, オンライン開催)が企画・実施され、盲ろう者の「音楽(聴覚)」「絵画(視覚)」「陶芸(触覚)」「お香(嗅覚)」「料理(味覚)」に手話言語使用を加えた6テーマを取り上げ、盲ろう者自身がどのような体験を持っているか、どのような情報を持っているかを語り合

う場を設けた。

参考文献：

- Edwards, T. (2014). From compensation to integration: Effects of the pro-tactile movement on the sublexical structure of Tactile American Sign Language, *Journal of Pragmatics*, 69, 22-41.
- Emmorey, K., Borinstein, H., & Thompson, R. (2003). Bimodal bilingualism: Code-blending between spoken English and American Sign Language. Paper presented at the 4th International Symposium on Bilingualism, Arizona State University.,
- 福島智 (2011) 『盲ろう者として生きて—指点字によるコミュニケーションの復活と再生』明石書店.
- Iwasaki, S., Bartlett, M., Manns, H., & Willoughby, L. (2018). The challenges of multimodality and multi-sensoriality: Methodological issues in analyzing tactile signed interaction. *Journal of Pragmatics*, 143, 215-227.
- 市川薫 (2001). 『人と人をつなぐ声・手話・指点字』岩波書店.
- 金澤貴之 (2001). 『聾教育の脱構築』明石書店.
- Mesch, J. (2001). Tactile Sign Language: Turn taking and question in signed conversations of deaf-blind people. Hamburg: Signum.
- Raanes, E. & Berge, S.S. (2017). Sign language interpreters' use of haptic signs in interpreted meetings with deafblind persons, *Journal of Pragmatics*, 107, 91-104.
- Stokoe, William C. 1960. Sign Language Structure: An Outline of the Visual Communication Systems of the American Deaf, *Studies in linguistics: Occasional papers* (No. 8). Buffalo: Dept. of Anthropology and Linguistics, University of Buffalo.
- Willoughby, Louisa, Manns, Howard, Iwasaki, Shimako, and Bartlett, Meredith. 2020. From seeing to feeling: how do deafblind people adapt visual sign languages? In *Dynamic language changes: Looking within and across languages*, edited by Keith Allan, 235-252.

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計35件（うち査読付論文 19件 / うち国際共著 3件 / うちオープンアクセス 23件）

1. 著者名 落合哉人・坊農真弓	4. 巻 24(1)
2. 論文標題 指文字会話における「揺さぶり」 盲ろう者はいかにして自らの感情的態度を示すか	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 社会言語科学	6. 最初と最後の頁 未定
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伝康晴	4. 巻 14
2. 論文標題 こども のフィルマー	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 ことばと文字	6. 最初と最後の頁 34-42
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坊農真弓・福島智	4. 巻 27(2)
2. 論文標題 研究者×当事者：福島智の世界とのつながりかた	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 認知科学	6. 最初と最後の頁 123-137
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11225/cs.2020.011	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 坂井田 瑠衣, 坊農 真弓, 牧野 遼作	4. 巻 19
2. 論文標題 「次の場所まで歩く」ことの相互行為的組織化：科学コミュニケーターによる来館者誘導の身体的プラクティス	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 質的心理学研究	6. 最初と最後の頁 7-25
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 Takehiko Maruyama, Yasuharu Den, Hanae Koiso	4. 巻 なし
2. 論文標題 Design and annotation of two-level utterance units in Japanese	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 In search of basic units of spoken language: A corpus-driven approach	6. 最初と最後の頁 155 - 180
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 牧野遠作, 坂井田瑠衣, 坊農真弓	4. 巻 43(3)
2. 論文標題 社会的インタラクションの定性的研究: 振る舞いの連なりに対する相互行為分析	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 バイオメカニズム学会誌	6. 最初と最後の頁 188-194
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Bono, Mayumi., Sakaida, Rui., Okada, Tomohiro., and Miyao, Yusuke.	4. 巻 なし
2. 論文標題 Utterance-Unit Annotation for the JSL Dialogue Corpus: Toward a Multimodal Approach to Corpus Linguistics	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Proc. of the LREC 2020, 9th Workshop on the Representation and Processing of Sign Languages	6. 最初と最後の頁 13-20
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Taiga Mori, Kristiina Jokinen, Yasuharu Den	4. 巻 なし
2. 論文標題 Analysis of body behaviours in human-human and human-robot interactions	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Proceedings of the LREC 2020 Workshop on People in language, vision and the mind (ONION 2020)	6. 最初と最後の頁 7-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Mika Enomoto, Yasuharu Den, Yuichi Ishimoto	4. 巻 なし
2. 論文標題 A conversation-analytic annotation of turn-taking behavior in Japanese multi-party conversation and its preliminary analysis	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 Proceedings of the 12th Conference on Language Resources and Evaluation (LREC 2020)	6. 最初と最後の頁 644-652
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大杉豊	4. 巻 5
2. 論文標題 ろう者共同体における手話言語とアイデンティティの擁護に研究が果たす役割	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 ろう者学デジタルジャーナル	6. 最初と最後の頁 なし
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.3998/dsdj.15499139.0005.012	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 伝康晴	4. 巻 21
2. 論文標題 伝達意図とアドレス性	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 語用論研究(招待論文)	6. 最初と最後の頁 1-18
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 尾田将史, 大杉豊	4. 巻 8
2. 論文標題 聾学校における手話教育の系統性の在り方 (後編)	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 手話・言語・コミュニケーション	6. 最初と最後の頁 63-94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小磯 花絵 , 天谷 晴香 , 居關 友里子 , 白田 泰如 , 柏野 和佳子 , 川端 良子 , 田中 弥生 , 伝 康晴 , 西川 賢哉	4. 巻 18
2. 論文標題 『日本語日常会話コーパス』モニター版の設計・評価・予備的分析	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 国立国語研究所論集	6. 最初と最後の頁 17-33
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15084/00002540	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 尾田将史 , 大杉豊	4. 巻 7
2. 論文標題 聾学校における手話教育の系統性の在り方 (前編)	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 手話・言語・コミュニケーション	6. 最初と最後の頁 62-85
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 Xing Yan , Yasuharu Den	4. 巻 なし
2. 論文標題 A corpus-based analysis of the functions of "kedo utterances" related to topic management	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Proceedings of the 3rd International Symposium on Linguistic Patterns in Spontaneous Speech (LPSS 2019)	6. 最初と最後の頁 39-43
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Den, Yasuharu	4. 巻 なし
2. 論文標題 How social settings affect our language and interaction: A case of fillers	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 Proceedings of the 3rd International Symposium on Linguistic Patterns in Spontaneous Speech (LPSS 2019)	6. 最初と最後の頁 30-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Iseki Yuriko, Kadota Keisuke, Den Yasuharu	4. 巻 なし
2. 論文標題 Characteristics of everyday conversation derived from the analysis of dialog act annotation	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 2019 22nd Conference of the Oriental COCOSDA International Committee for the Co-ordination and Standardisation of Speech Databases and Assessment Techniques (O-COCOSDA)	6. 最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1109/o-cocosda46868.2019.9041235	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Takanashi Katsuya, Den Yasuharu	4. 巻 37
2. 論文標題 Field Interaction Analysis: A Second-Person Viewpoint Approach to Maai	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 New Generation Computing	6. 最初と最後の頁 263 ~ 283
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.1007/s00354-019-00062-2	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Bono, Mayumi., Sakaida, Rui., Makino, Ryosaku., Okada, Tomohiro., Kikuchi, Kouhei., Cibulka, Mio., Willoughby, Louisa., Iwasaki, Shimako., and Fukushima, Satoshi.	4. 巻 なし
2. 論文標題 Tactile Japanese Sign Language and Finger Braille: An Example of Data Collection for Minority Languages in Japan	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Proceedings of the Eleventh International Conference on Language Resources and Evaluation	6. 最初と最後の頁 BON018.18027
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 該当する

1. 著者名 Bono, Mayumi., Sakaida, Rui., Makino, Ryosaku., and Joh, Ayami.	4. 巻 なし
2. 論文標題 Miraikan SC Corpus: A Trial of Data Collection in Semi-opened and Semi-controlled Environment	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Proceedings of the LREC 2018 Special Speech Sessions, The 11th edition of the Language Resources and Evaluation Conference (LREC)	6. 最初と最後の頁 30-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.15084/00001914	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 浦田留衣、上原景子、山本綾乃、金澤貴之、大杉豊	4. 巻 68
2. 論文標題 聴覚障害学生の英語学 習支援：日本語、日本手話、英語、アメリカ手話の言語学的観点から	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 群馬大学教育学部紀要 人文・社会科学編	6. 最初と最後の頁 79-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福島智	4. 巻 9
2. 論文標題 読書の基本は、実体験と想像力	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 ことばと文字	6. 最初と最後の頁 35-48
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福島智	4. 巻 1099
2. 論文標題 しっかりした握手を	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 学内広報淡青評論	6. 最初と最後の頁 裏表紙
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福島智	4. 巻 10(643)
2. 論文標題 情報は文脈と受け手の判断がいのちだ	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 情報処理	6. 最初と最後の頁 870-871
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 福島智	4. 巻 56(1)
2. 論文標題 『優生保護法』は、今も私たちの内面に潜んでいないか？	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 臨床心理学会誌	6. 最初と最後の頁 31-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 小磯花絵・伝康晴	4. 巻 15
2. 論文標題 『日本語日常会話コーパス』データ公開方針 法的・倫理的な観点からの検討を踏まえて	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国立国語研究所論集	6. 最初と最後の頁 75-89
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Hanae Koiso, Yasuharu Den, Yuriko Iseki, Wakako Kashino, Yoshiko Kawabata, Ken'ya Nishikawa, Yayoi Tanaka, and Yasuyuki Usuda	4. 巻 なし
2. 論文標題 Construction of the Corpus of Everyday Japanese Conversation: An interim report	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Proc. 11th International Conference on Language Resources and Evaluation	6. 最初と最後の頁 4259-4264
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Yasuharu Den	4. 巻 なし
2. 論文標題 F-formation and social context: How spatial orientation of participants' bodies is organized in the vast field	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Proc. LREC2018 Workshop: LB-IRL2018 and MMC2018 Joint Workshop	6. 最初と最後の頁 35-39
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Rui Sakaida and Yasuharu Den	4. 巻 なし
2. 論文標題 Sitting down and standing up as resources for reorganization of participation framework: Analysis of preparatory meeting for Nozawa Onsen Fire Festival	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Proc. LREC2018 Workshop: LB-IRL2018 and MMC2018 Joint Workshop	6. 最初と最後の頁 15-19
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 Hanae Koiso, Yasuyuki Usuda, Haruka Amatani, Yoshiko Kawabata, and Yasuharu Den	4. 巻 なし
2. 論文標題 Design and preliminary analysis of the Corpus of Everyday Japanese Conversation	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 Proc. LREC2018 Workshop: LB-IRL2018 and MMC2018 Joint Workshop	6. 最初と最後の頁 1-5
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 坊農 真弓	4. 巻 19
2. 論文標題 手話相互行為における即興手話表現 修復の連鎖の観点から	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 社会言語科学	6. 最初と最後の頁 59-74
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) 10.19024/jajls.19.2_59	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大杉豊, 須藤正彦, 細野昌子, 宇都野康子, 松藤みどり	4. 巻 25(2)
2. 論文標題 触手話通訳を含む聴覚障害者のための情報保障体制に関する一考察 学術企画の コーディネート実践 例から	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 筑波技術大学テクノレポート	6. 最初と最後の頁 1-6
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 大杉豊	4. 巻 25(1)
2. 論文標題 茨城地域居住ろう者の手話言語コーパス構築の研究	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 筑波技術大学テクノレ ポート2017	6. 最初と最後の頁 119-122
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 田中弥生, 柏野和佳子, 角田ゆかり, 伝康晴, 小磯花絵	4. 巻 14
2. 論文標題 『日本語日常会話コーパス』の構築 : 会話収録法に着目して	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 国立国語研究所論集	6. 最初と最後の頁 275-292
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 福島智	4. 巻 857
2. 論文標題 人間と社会を支える「命の柱」(特集 相模原事件は問う)	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 教育	6. 最初と最後の頁 5-10
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

[学会発表] 計56件(うち招待講演 19件/うち国際学会 22件)

1. 発表者名 福島智
2. 発表標題 点字は私の父、指字は私の母
3. 学会等名 日本の点字制定130周年記念講演会(招待講演)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Mayumi Bono, Rui Sakaida, Kanato Ochiai, Satoshi Fukushima.
2. 発表標題 Maintaining Intersubjectivity in Finger Braille Interpreter-Mediated Interaction: A Study of Other-Initiated Repairs by a Deafblind Man
3. 学会等名 17th International Pragmatics Conference (IPrA 2021) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Kanato Ochiai, Mayumi Bono
2. 発表標題 How Do Deafblind People Represent Their Attitudes?: "Shaking-Fingers" in Finger Braille Conversations
3. 学会等名 17th International Pragmatics Conference (IPrA 2021) (国際学会)
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 Bono, Mayumi., Sakaida, Rui., Okada, Tomohiro., and Miyao, Yusuke.
2. 発表標題 Utterance-Unit Annotation for the JSL Dialogue Corpus: Toward a Multimodal Approach to Corpus Linguistics
3. 学会等名 LREC 2020, 9th Workshop on the Representation and Processing of Sign Languages (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 Stefanov, Kalin., and Bono, Mayumi.
2. 発表標題 Towards Digitally-Mediated Sign Language Communication
3. 学会等名 7th International Conference on Human-Agent Interaction (HAI2019) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Bono, Mayumi., and Sakaida, Rui.
2. 発表標題 Halting Progressivity and Repair in Signed and Tactile Interaction:A Study of Intersubjective Understanding in Sign Language and Finger Braille
3. 学会等名 The 15th International Pragmatics Conference (16th IPRA) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡田智裕, 坊農真弓
2. 発表標題 日本手話会話におけるろう者の言語使用 年代別のろう者のマウジング使用頻度に着目して
3. 学会等名 第43回社会言語科学会研究大会 (JASS)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Bono, Mayumi., Sakaida, Rui., Okada, Tomohiro., and Miyao, Yusuke.
2. 発表標題 Utterance-Unit Annotation for the JSL Dialogue Corpus: Toward a Multimodal Approach to Corpus Linguistics,
3. 学会等名 LREC 2020, 9th Workshop on the Representation and Processing of Sign Languages: Sign Language Resources in the Service of the Language Community (国際学会)
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 矢野 羽衣子, 大杉 豊
2. 発表標題 不就学ろう者の手話表現分析：宮窪手話との比較考察による位置付けの試み
3. 学会等名 日本手話学会第45回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 福島智
2. 発表標題 生きることと語ること
3. 学会等名 東京藝術大学DOORプロジェクト会合（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 福島智
2. 発表標題 絶対的孤独を通じて考える多様性・格差・教養そして他者に反射する自分
3. 学会等名 コグニティブ・デザインング・エクセレンス（CDE）東大 & IBM共同研究プロジェクト会合（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 福島智
2. 発表標題 盲ろう者として生きて
3. 学会等名 早稲田大学「障害者のリアルに迫るゼミ」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 福島智
2. 発表標題 コンタクト：惑星のなかのこの身体
3. 学会等名 厚労省補助事業「介護の魅力等発信事業」プロジェクト会合（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 福島智
2. 発表標題 盲ろう者にとっての豊饒化したコミュニケーションー指点字通訳をどのように育てていったのか？ー
3. 学会等名 国立情報学研究所主催第一回国際ワークショップ（招待講演）（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 福島智
2. 発表標題 人間を考える～幸せとは何か～
3. 学会等名 NHKカルチャー・スズケン市民講座（招待講演）
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 伝康晴
2. 発表標題 認知科学から見た非流暢性
3. 学会等名 第1回社会言語科学会シンポジウム「非流暢性から言語とコミュニケーションを考える」（招待講演）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Den, Yasuharu
2. 発表標題 Instructing with demonstrating bodily interaction: Multimodal resources used in instruction of Jiu-jitsu techniques
3. 学会等名 16th International Pragmatics Conference (IPrA 2019)（国際学会）
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Bono, Mayumi., and Sakaida, Rui.
2. 発表標題 Halting Progressivity and Repair in Signed and Tactile Interaction:A Study of Intersubjective Understanding in Sign Language and Finger Braille
3. 学会等名 The 15th International Pragmatics Conference (16th IPRA) (国際学会)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 Bono, Mayumi.
2. 発表標題 Collaborative Repair in Sign Language Interaction: Which Signer Solves the Trouble in a Visually Connected Situation?
3. 学会等名 The 5th International Conference of Conversation Analysis (ICCA2018) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Bono, Mayumi.
2. 発表標題 How do deafblind people share their stance?: A comparative analysis of expressing laughter in tactile Japanese sign language and finger braille interactions
3. 学会等名 The 8th International Conference of Gesture Studies (ISGS8) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Sakaida, Rui., & Bono, Mayumi.
2. 発表標題 When nonverbal behavior is interpreted: Strong orientation toward embodiment in finger braille interpretation
3. 学会等名 The 8th International Conference of Gesture Studies (ISGS8) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Makino, Ryosaku., & Bono, Mayumi
2. 発表標題 Hand positions for showing speakership: A report of language selection by the deafblind man
3. 学会等名 The 8th International Conference of Gesture Studies (ISGS8) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 岡田智裕, 坊農真弓
2. 発表標題 日本手話会話におけるろう者の言語使用 年代別のろう者のマウジング使用頻度に着目して
3. 学会等名 第43回社会言語科学会研究大会 (JASS)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 坊農真弓, 坂井田瑠衣, 牧野遼作
2. 発表標題 マルチモーダルコーパス公開のための個人情報保護の試み
3. 学会等名 電子情報通信学会ヴァーバル・ノンヴァーバル・コミュニケーション研究会 (VNV) 第12回年次大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 坊農真弓
2. 発表標題 マルチモーダルインタラクションからみた手話
3. 学会等名 HCGシンポジウム2018特別セッションIII: 「高精度手話データベース構築と手話研究への展開」(招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Osugi, Yutaka
2. 発表標題 Transforming Research into Sign Language and Identity Advocacy in the Community
3. 学会等名 Deaf Studies Conference (招待講演) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 福島智
2. 発表標題 バリアフリーの過去・現在・未来
3. 学会等名 先端研カフェセミナー(東大先端研) (招待講演)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 福島智
2. 発表標題 どもる人たちの当事者運動を振り返る
3. 学会等名 伊藤伸二さんを囲んで
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 福島智
2. 発表標題 障害当事者の視点で人と社会のバリアフリー化を研究する
3. 学会等名 市民公開講座 (招待講演)
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伝康晴・居關友里子
2. 発表標題 日常場面における間接アドレス発話
3. 学会等名 シンポジウム「日常会話コーパス」IV
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 伝康晴
2. 発表標題 伝達意図とアドレス性
3. 学会等名 日本語用論学会第21回大会（招待講演）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Yasuharu Den
2. 発表標題 When gestures affect syntactic structures: A case of postposed construction in Japanese conversation
3. 学会等名 The 8th International Conference of Gesture Studies (ISGS8) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 伝康晴
2. 発表標題 フィールド撮影データは何を語るか?
3. 学会等名 2018年度人工知能学会全国大会（第32回）
4. 発表年 2018年

1 . 発表者名 Bono, Mayumi
2 . 発表標題 Collaborative Repair in Sign Language Interaction: Which Signer Solves the Trouble in a Visually Connected Situation?
3 . 学会等名 The 5th International Conference of Conversation Analysis (ICCA2018) (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Bono, Mayumi
2 . 発表標題 How do deafblind people share their stance?: A comparative analysis of expressing laughter in tactile Japanese sign language and finger braille interactions
3 . 学会等名 The 8th International Conference of Gesture Studies (ISGS8) (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Sakaida, Rui. & Bono, Mayumi.
2 . 発表標題 When nonverbal behavior is interpreted: Strong orientation toward embodiment in finger braille interpretation
3 . 学会等名 The 8th International Conference of Gesture Studies (ISGS8) (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1 . 発表者名 Makino, Ryosaku. & Bono, Mayumi
2 . 発表標題 Hand positions for showing speakership: A report of language selection by the deafblind man
3 . 学会等名 The 8th International Conference of Gesture Studies (ISGS8) (国際学会)
4 . 発表年 2018年

1. 発表者名 Bono, Mayumi., Sakaida, Rui., Makino, Ryosaku., Okada, Tomohiro., Kikuchi, Kouhei., Cibulka, Mio., Willoughby, Louisa., Iwasaki, Shimako., & Fukushima, Satoshi
2. 発表標題 Tactile Japanese Sign Language and Finger Braille: An Example of Data Collection for Minority Languages in Japan
3. 学会等名 The 11th edition of the Language Resources and Evaluation Conference (LREC) (国際学会)
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Bono, Mayumi
2. 発表標題 Improvisational signing: How JSL signers solve word-finding problems in interaction
3. 学会等名 The 6th Meeting of Signed and Spoken Language Linguistics (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 Bono, Mayumi.
2. 発表標題 Recipients' stance-taking actions during storytelling in signed interactions: An analysis of sequential position of nodding and facial expression
3. 学会等名 The 15th International Pragmatics Conference (15th IPRA) (国際学会)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 坊農真弓, 坂井田瑠衣, 牧野遼作
2. 発表標題 マルチモーダルコーパス公開のための個人情報保護の試み
3. 学会等名 電子情報通信学会ヴァーバル・ノンヴァーバル・コミュニケーション研究会 (VNV) 第12回年次大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 繁益陽介, 大杉豊
2. 発表標題 手話習得過程における補完的学習法の検討～手話学習者の手話習得に対する自信度の調査研究～
3. 学会等名 第50回 全国手話通訳問題研究集会 ～ サマーフォーラム in ひろしま～第6分科会：学習や手話通訳者の養成
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 坂井肇, 大杉豊
2. 発表標題 公立聴覚特別支援学校を対象とした質問紙調査の回答結果にみられる教員の手話の向上を必要とする理由の傾向
3. 学会等名 日本特殊教育学会第55回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 坂井肇, 大杉豊
2. 発表標題 公立聴覚特別支援学校の手話研修に技能評価が導入されない理由の分析
3. 学会等名 日本手話学会第43回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 繁益陽介, 大杉豊
2. 発表標題 手話習得過程における補完的学習法の検討-手話学習者の手話プロソディの特徴-
3. 学会等名 日本手話学会第43回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 伝康晴
2. 発表標題 日常会話における「と文末」
3. 学会等名 シンポジウム「日常会話コーパス」
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 小磯花絵, 天谷晴香, 居關友里子, 臼田泰如, 柏野和佳子, 川端良子, 田中弥生, 伝康晴
2. 発表標題 『日本語日常会話コーパス』構築状況と予備的分析
3. 学会等名 言語処理学会第24回年次大会
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 川端良子, 伝康晴
2. 発表標題 日常会話における共有プランの構築過程の類型
3. 学会等名 日本認知科学会第34回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 小磯花絵, 伝康晴
2. 発表標題 『日本語日常会話コーパス』のデータ公開方針 - 法的・倫理的な観点から -
3. 学会等名 言語資源活用ワークショップ2017
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 伝康晴
2. 発表標題 会話の話し手・聞き手ってなに?
3. 学会等名 立命館大学文学部言語コミュニケーション専攻講演会(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 福島智
2. 発表標題 東京オリンピック・パラリンピックに向けたバリアフリー社会の構築について 盲ろう者の体験をとおして考える
3. 学会等名 1%(ワンパーセント)クラブ講演会(経団連)(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 福島智
2. 発表標題 憲法施行70年 いま、障害者の生きる価値を考える
3. 学会等名 障害者の幸せと平和を考えるシンポジウム(NPO法人日本障害者協議会主催)(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 福島智
2. 発表標題 インクルーシブな社会における心のバリアフリー
3. 学会等名 (株)日本保育サービス園長会(招待講演)
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 福島智
2. 発表標題 自分らしく歩く
3. 学会等名 ROCKETセミナー（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 福島智
2. 発表標題 バリアフリーの化学反応を引き起こす触媒となった、先端研
3. 学会等名 先端研設立30周年記念式典特別講演（招待講演）
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 福島智
2. 発表標題 相模原障害者殺傷事件が私たちに問いかけるもの
3. 学会等名 「障害者週間」障害者と市民の記念のつどい(社会福祉法人名古屋身体障害者福祉連合会)
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計14件

1. 著者名 伝 康晴	4. 発行年 2021年
2. 出版社 開拓社	5. 総ページ数 140 - 161(分担執筆)
3. 書名 身体的実演を伴う教授場面の相互行為分析 アドレス性に注目して 『動的語用論の構築へ向けて3』	

1. 著者名 福島智	4. 発行年 2019年
2. 出版社 大月書店	5. 総ページ数 73-80
3. 書名 「魂の嘔吐感」とどう向き合うか - 植松聖被告と面会して『いのちを選ばないで~やまゆり園事件が問う優生思想と人権』藤井克徳他編(分担執筆)	

1. 著者名 諏訪 正樹、伝 康晴、坂井田 瑠衣、高梨 克也	4. 発行年 2020年
2. 出版社 春秋社	5. 総ページ数 272
3. 書名 「間合い」とは何か	

1. 著者名 細馬 宏通, 菊地 浩平, 榎本美香 木本幸憲, 伝康晴	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ひつじ書房	5. 総ページ数 288
3. 書名 ELAN入門	

1. 著者名 久松三二, 大杉豊, 全日本ろうあ連盟(共編)	4. 発行年 2019年
2. 出版社 明石書店	5. 総ページ数 312
3. 書名 手話言語白書ー多様な言語の共生社会をめざして	

1. 著者名 坊農真弓	4. 発行年 2019年
2. 出版社 ナカニシヤ出版	5. 総ページ数 未定
3. 書名 「身体に刻みこまれた二つのことばの記憶 - 即興手話表現というプラクティス - 」菅原和孝・岩谷彩子編 『身ぶりと記憶』	

1. 著者名 綾屋紗月、澤田唯人、藤野博、古川茂人、坊農真弓、浦野茂、浅田晃佑、荻上チキ、熊谷晋一郎	4. 発行年 2018年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 304
3. 書名 ソーシャル・マジョリティ研究	

1. 著者名 大杉豊	4. 発行年 2018年
2. 出版社 信山社出版	5. 総ページ数 532
3. 書名 「ろう者」長瀬 修、川島 聡(編) 『障害者権利条約の実施』	

1. 著者名 福島智	4. 発行年 2019年
2. 出版社 東京都	5. 総ページ数 未定
3. 書名 東京都おもてなしポケットガイドブック	

1. 著者名 小磯花絵・天谷晴香・石本祐一・居關友里子・白田泰如・柏野和佳子・川端良子・田中弥生・伝康晴・西川賢哉	4. 発行年 2019年
2. 出版社 国立国語研究所	5. 総ページ数 58
3. 書名 『日本語日常会話コーパス』モニター公開版 コーパスの設計と特徴(プロジェクト報告書3)	

1. 著者名 坊農真弓	4. 発行年 2018年
2. 出版社 金子書房	5. 総ページ数 133-167(分担執筆)
3. 書名 「多数派の会話にはルールがあるの？」綾屋紗月編著『ソーシャルマジョリティ研究』	

1. 著者名 坊農真弓	4. 発行年 2017年
2. 出版社 近代科学社	5. 総ページ数 2
3. 書名 「ビブリオ・トーク30: ぼくの命は言葉とともにある(9歳で失明, 18歳で聴力も失ったぼくが東大教授となり, 考えてきたこと)」情報処理学会 会誌編集委員会編『IT研究者のひらめき本棚 ビブリオ・トーク: 私のオススメ』	

1. 著者名 坊農真弓	4. 発行年 2017年
2. 出版社 共立出版	5. 総ページ数 3
3. 書名 「多人数インタラクション」人工知能学会編『人工知能学大事典』	

1. 著者名 福島智	4. 発行年 2017年
2. 出版社 日本経済新聞出版社	5. 総ページ数 11
3. 書名 「解説 知的異種格闘技の醍醐味」『生命・人間・経済学』宇沢弘文・渡辺格	

〔産業財産権〕

〔その他〕

坊農研究室 http://research.nii.ac.jp/~bono/ja/index.html 国際手話に関する講演会 http://research.nii.ac.jp/~bono/ja/event/Onno.html 盲ろう者コミュニティにおけるコミュニケーションアクセススウェーデン，オーストラリア，日本からの報告 http://research.nii.ac.jp/~bono/ja/event/20191214.html 手話コーパスワークショップ，スウェーデン手話コーパスの設計 http://research.nii.ac.jp/~bono/ja/event/20191216.html 日本手話話し言葉コーパスプロジェクト http://research.nii.ac.jp/jsl-corpora/public/ みんなでつくる日本手話話し言葉コーパス http://research.nii.ac.jp/jsl-corpora/research/index.html

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	大杉 豊 (Ohsugi Yutaka) (60451704)	筑波技術大学・障害者高等教育研究支援センター・教授 (12103)	
研究分担者	福島 智 (Fukushima Satoshi) (50285079)	東京大学・先端科学技術研究センター・教授 (12601)	
研究分担者	傳 康晴 (Den Yasuharu) (70291458)	千葉大学・大学院人文科学研究院・教授 (12501)	

6. 研究組織 (つづき)

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究協力者	岩崎 志真子 (Iwasaki Shimako)	モナシュ大学・School of Language, Literatures, Culture, and Linguistics・Lecturer	海外研究協力者
研究協力者	ウィロービー ルイーザ (Willoughby Louisa)	モナシュ大学・School of Language, Literatures, Culture, and Linguistics・Associate Professor	海外研究協力者
研究協力者	落合 哉人 (Ochiai Kanato)	筑波大学大学院・人文社会科学研究科・大学院生	
研究協力者	岡田 智裕 (Okada Tomohiro)	総合研究大学院大学・複合科学研究科・大学院生	
連携研究者	牧野 遼作 (Ryosaku Makino) (10780637)	広島工業大学・情報学部・助教 (35403)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計9件

国際研究集会 Panel session, Intersubjectivity in multi-sensory interaction, The 15th International Pragmatics Conference (16th IPRA).	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 国際手話に関する講演会	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 第一回国際ワークショップ, 盲ろう者コミュニティにおけるコミュニケーションアクセススウェーデン, オーストラリア, 日本からの報告	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 手話コーパスワークショップ, スウェーデン手話コーパスの設計	開催年 2019年～2019年
国際研究集会 Prof. Johanna Mesch 講演会	開催年 2018年～2018年

国際研究集会 Prof. Johanna Meschと東京盲ろう者友の会交流会	開催年 2018年～2018年
国際研究集会 オーストラリア触手話講演会(東京)	開催年 2017年～2017年
国際研究集会 オーストラリア触手話講演会(大阪)	開催年 2017年～2017年
国際研究集会 オーストラリア盲ろう者Leah van PoppeI氏と東京盲ろう者友の会の交流会	開催年 2017年～2017年

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関
---------	---------